

第2講：111「朝、起こされるのと」

おやさと研究所講師
澤井 真 Makoto Sawai

「朝、起こされるのと」

教祖が、飯降よし系にお聞かせ下されたお話に、「朝起き、正直、働き。朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」と。

今回、取り上げたいのは以下の2つの点である。第1に本席飯降伊蔵の入信とよし系の生涯、第2に本席の生き方に学ぶ「朝起き・正直・働き」である。

本席飯降伊蔵の入信とよし系の生涯

よし系は慶応2（1866）年8月17日に、大和国添上郡樺本村（現天理市樺本町）に、飯降伊蔵・さとの長女として誕生した。後に本席と定まる飯降伊蔵の入信は、妻さとの流産後の肥立ち患いであった。元治元（1864）年6月25日、伊蔵は救けていただいたお礼に、さとと共にお屋敷へ初めて帰った。大工であった伊蔵はお社の献納を思いつき、翌7月26日におやしきに帰った際にその旨を教祖に申し上げた。ところが、「社はいらぬ、小さいものでも建てかけ。」という教祖の言葉を受けて取り掛かったのが、現在の「つとめ場所」の普請であった。その後、まもなくして大和事件の「ふし」が起こったが、伊蔵はつとめ場所の完成を責任をもってやり遂げた。

さまざまなふしを見せられながらも、救けていただいた御恩報じとして、伊蔵夫妻は喜んで毎日を通り、2年後、待望の我が子を授かった。伊蔵が教祖にお目通りし、さとの身上をたすけていただいたうえに、念願の子供を授けていただいたお礼を申し上げたところ、教祖は、「何でもよきことは『よしよし』というのやから」と仰せられ、「よし系」と命名されたと伝えられる（『飯降よし系』『改訂天理教事典 第三版』）。

また、『稿本天理教教祖伝逸話篇』には、よし系が、「ちよとはなし、と、よろづよの終りに、何んで、ようし、ようしと言うのですか。」とお伺いしたところ、教祖は、「ちよとはなし、と、よろづよの仕舞に、ようし、ようしと言うが、これは、どうでも言わなならん。ようし、ようしに、悪い事はないやろ。」と仰せられた逸話が掲載されている（109「ようし、ようし」）。このように、教祖は「よしよし」と前向きに喜んでいくことの大切さを、よし系に伝えられた。

明治14（1881）年、飯降一家はおやしきに一家で伏せ込んだ。その後、教祖は、「三味線を持て。」と、よし系が12歳の時に、女鳴物の三味線を教えられた。明治20年陰暦正月26日、つとめを急き込まれた親神の思召に応え、「おつとめの時、若し警察よりいかなる干涉あっても、命捨てゝもという心の者のみ、おつとめせよ」（『稿本天理教教祖伝』329頁）という中山眞之亮初代真柱の声に応えて、当時22歳のよし系は三味線を勤めている。このように、よし系は教祖ご在世当時、両親である伊蔵夫妻とともに教祖の傍でつとめ、教祖から教えていただいた三味線を命がけで勤めた。

本席の生き方に学ぶ「朝起き・正直・働き」

本逸話に類似した逸話に「三つの宝」(29)がある。その逸話は、教祖が伊蔵に対して、稲の種である粃を通して、「朝起き・正直・働き」を教えられたものである。このことから、教祖は、日々の生活の実践として、「朝起き・正直・働き」を繰り返し説かれていたであろうことが推測できる。

「朝起き」に関して、「朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。」とあるように、日々、親神から身体を結構にお借りしているため、朝は誰かに起こされて起きるというような一日の迎え方であってはいけな、ということが諭される。「一日の理は朝にある。」（明治22年5月7日）という「おさしづ」の割書には、永尾よし系、つまり飯降よし系の名前が記されている。今朝も身体をお借りして目覚めることができたことに喜び、親神に感謝しながら朝を迎えるのと、朝誰かに起こされ、身体をお借りできていることを十分に感謝できないまま一日を始めるのでは、大きな違いがある。

「正直」については、「蔭でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。」と諭されている。『日本国語大辞典』によれば、「正直」とは、「嘘をつかないこと」や「ごまかしのないこと」という意味ばかりではなく、「陰日向のないこと」、「素直であること」という意味がある。

おやしきから樺本への帰り道、夜中にもかかわらず、伊蔵は誰に言われるでもなく壊れた橋があれば直し、土の道路を補修しながら帰られたと伝えられる。「千軒きっての正直者」と呼ばれた背景には、単に嘘をつかないという意味だけではなく、陰日向のない働きがあった。

さらに、正直について、「聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。」とある。『天理教教典』の第8章「道すがら」にも記されているように、口と心と行いが常に一致することの重要性が教えられている。また、これら3つが今はたとえ一致していなくとも、少しでも一致するように心の成人を重ねていくのが、信仰者としての歩み方であると言えよう。教祖を慕い、親神の教えを素直に実行する父伊蔵の「正直」の姿があったからこそ、教祖は、「嘘」という対義語を出しながら諭されたと考えられる。

「働き」について、「もう少し、もう少しと、働いた上に働くのは、欲ではなく、真実の働きやで。」と諭されている。ここで言う、「働いた上に働く」とは、単に労働時間を増やすという意味ではなく、自分のための「働き」だけではなく、世のため人のために「働く」という意味だと考えられる。このことについては、「同じ働きをしても、陰日向なく自分の事と思うて働く」と、何でも我が事だと思って働き、「はたはたの者を楽にするから、はたらくと言うのや。」と、天理教の信仰者としての生き方や働き方が示される（197「働く手は」）。

日々、「朝起き・正直・働き」を地道に実践しながら3つの粃種を蒔くことで、穂にはやがて沢山の実りを迎える。この意味において、本逸話は、本席飯降伊蔵・よし系親子を通して、毎日素直に信仰を実践していくことの重要性が凝縮した逸話であると言えよう。